

いっしょに学ぼう、思い起こそう

沖縄週間（6月21日～27日）



日本聖公会総会で「沖縄週間」設置にあたって

横浜教区 司祭 河崎 望む

聖公会新聞によりますと、五月の総会で「沖縄週間」設置の件が再び可決され、一九九九年から二〇〇二年まで守られることになりました。

沖縄週間は九四年五月に開催された、日本聖公会第四六（定期）総会にて決議されましたがその提案理由は、

豊かな自然と独自の文化に恵まれた沖縄、第二次世界大戦における地上戦の経験、その後二十七年間に及ぶ米軍による統治、現在も叫び続けている多くの正義と平和の課題を、沖縄の現実に触れることによって学び、沖縄教区の教役者・信徒と共に参加者がそれぞれの日常生活の中で信仰の課題として担っていく契機とする。

「正義と平和」委員会は一九八六年の第三九定期総会で沖縄教区の提案によって設置された。一九八八年第一回正義と平和協議会を沖縄で開催。九〇

年東京と川崎で、九二年は広島で、体験学習と聖書の学びを結び付け共有する行動を行ってきた。今後さらに沖縄教区との協力を深め、日本聖公会の教役者・信徒が、「一つの体」として、「共に苦しみ、共に喜ぶ」（コリントの信徒への手紙一―二二―二六）ものとして成長することを願うものである。とし、沖縄教区が置かれている沖縄の現実、とくに正義と平和に関わる課題を、日本聖公会全体の宣教に有機的につながる重要な宣教課題としてひろく共有することを目的として、「沖縄週間」を設置する。

毎年、沖縄慰霊の日（六月二三日）を含む一週間を「沖縄週間」とし、以下の活動を行う。

- 一 沖縄の宣教課題を具体的に共有する祈り、ポスターの作成と配布。
- 二 日本聖公会一〇教区の教役者・信徒が沖縄教区の教役者・信徒と交

流するための企画・実施等。

三 なお期間は一九九五年から

一九九八年の四年間とする。

尚、この議案は、「正義と平和」委員会と日本聖公会沖縄教区常置委員会の提出議案で可決されたのです。

この決議に基づき、一九九五年六月一八日から二四日までの一週間、第一回沖縄週間が守られることになり、この沖縄週間の特務が下記のように定められました。

沖縄週間特務

全能の神よ、あなたは福音の光によって、わたしたちを使徒たちからの唯一の聖なる公会に召し、主に仕えさせてください。またわたしたちを祝し、今沖縄戦五〇周年を記念する機会を与えてく

ださいましたことを、心より感謝いたします。今わたしたちは沖縄戦および他の戦争によって、命を失った人々の死を悼み、その魂を主の憐れみのみ手にゆだねます。どうかわたしたちがその犠牲をむなしくせず、悲しむ者を慰め、助け、ともに主にある平和を追い求めさせてください。悲しみを喜びに、憎しみを愛に変えてくださる主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

今総会で再びこの問題が取り上げられたことは、私たちの沖縄に対する理解がまだまだ足りないことの表れだと思えます。

以下に沖縄について、先の戦争を中心に、簡単ですが触れさせていただきます。何かのお役に立てば幸いです。

はじめに

沖縄は一九七二年五月一五日の施政権返還（いわゆる「本土復帰」）以来、二六年を経過して、外見上は日本の社会の中に溶け込んでいるように見えます。しかし、その沖縄は今、県民一人当たり平均所得では全国の最下位、失業率は、全国平均のほぼ二倍という経済問題を抱え続けています。それに加えて、全国の米軍専用基地の七五％が沖縄県、特に沖縄本島に集中しています。米兵による犯罪と軍事演習などによる被害は、復帰以前と変わることなく、住民を脅かしています。

九五年九月に起きた米兵による少女暴行事件に対する沖縄県民の怒りと行動は、戦後五〇年と言われても、沖縄では戦後でないことの主張でもありました。

先の大戦では、アジアの關係諸国はじめ、広島、長崎の悲劇と共に、日本国民

全てが辛く、悲しい思いをもっています。

先の大戦が一体何だったのかは、平和を考えると、それを振り返ることは大切なことではないでしょうか。沖縄戦には、振り返りに必要な全ての内容が含まれているのです。

一 なぜ沖縄戦が起こったのか

一九四一年（昭和一六年）一月八日、日本軍はハワイの真珠湾と英領マレー半島とを奇襲攻撃し、いわゆる太平洋戦争が始まりました。始めは、予想以上の戦果をあげ、翌年の三月までに東南アジアのほとんどを占領することに成功しました。しかし、この成功は日本軍の十分な準備と奇襲攻撃に対して、連合国側は、装備や士気に劣る植民地軍でしか対抗出来なかったことの結果でした。

一九四二年（昭和一七年）六月、ミッドウェー海戦で日本軍が惨敗したことを転機として、アメリカ軍は、本格的な反撃を開始しました。一九四四年（昭和一九年）に入ると、アメリカ軍は中部太平洋からマリアナ諸島を支配し、六月には、サイパン島に上陸し、日本軍は大打撃を受けました。このことによりアメリカ軍は、マリアナ基地からB二九爆撃機を発進させ、日本本土を空襲することが出来るようになりました。この時点で、日本軍の敗北は決定的となり、これ以後の戦闘は、無意味な流血、無駄な犠牲を意味するものとなりました。

アメリカ軍は一九四四年一〇月に、沖縄上陸作戦を決定しました。それは、沖縄を占領し、強力な基地を設定するためでした。

アメリカ軍にとって沖縄の軍事的価値は非常に高く、沖縄を獲得出来れば、日本本土を余裕をもって空爆できるだけで

なく、台湾、東シナ海、朝鮮半島、対馬海峡、中国東部などを制圧出来るようになるのです。そのような地理的条件と共に、沖縄には、本島と伊江島を合わせれば、八〇〇機を収容出来る飛行場と、多数の軍艦が停泊出来る港が二か所あり、物資の輸送、集積にも便利で、また、台湾、フィリピン、南方の日本軍を完全に本土切り離すことが出来るのです。そのためアメリカ軍が沖縄戦に投入したのは、艦船一、四五七隻、兵員五〇万人以上というものすごいものでした。

この時アメリカ軍は既に、日本本土と沖縄の相違点に着目し、沖縄を本土から分離することを考えており、そのために沖縄の歴史、地理や社会、文化についての調査を進め、上陸と同時に、軍政府を開設し、琉球列島の日本本土からの分離を宣言したのです。

二 沖繩守備軍の配備

大本営が沖繩守備軍として、第三軍を設置したのは、一九四四年（昭和一九年）三月二日のことでした。当初は飛行場の守備隊程度で良いだろうと考えていたのです。

しかしサイパンでの戦いが始まった六月ごろから、大本営は本腰を入れて沖繩守備軍の強化に乗り出したのです。それは、本土防衛の必要からでした。準備不足の本土防衛のための前線地帯として、時間かせぎの役割を担わされただけだったのです。

沖繩は、一五世紀の始めに中山王尚ウラハシ氏によって琉球王国が形成され、中国（明）、朝鮮や日本と東南アジア諸国との中継貿易を活発に行ない、一四世紀から一六世紀までの約三〇〇年間で『沖繩の大交易時代』と呼び、交易相手国の人々

からは、「正直で奴隷を買わないし、自分たちの同胞を決して裏切らない優れた人々」と一目も二目も置かれていました。

しかし、一七世紀初頭に、薩摩島津氏が徳川幕府の許可を得て、琉球王国に侵入しました。薩摩は、沖繩の中継貿易を禁止し、独自に中国との貿易のため沖繩を利用し、また、沖繩の貴重な産物である砂糖の大半を、年貢または買上げ品として、薩摩に上納させました。その一方、薩摩は、幕府に対して沖繩が外国であるかのように思わせるため將軍の代替わりの時には慶賀使を、琉球王の代替わりの時には謝恩使を江戸に送らせました。身分制度と差別が徹底していた江戸時代の社会で、沖繩の人々は幕藩体制の枠外にあるものとして差別的に見下されるようになって行きました。

一九世紀になってフランス、アメリカ、イギリスなどが日本の開国を求めた

時、彼らは沖繩との交易だけでなく領有までも目指していましたが、幕府は自らに余力がないために沖繩の処理は薩摩に任せ、薩摩も同じ理由から沖繩を守る意志を放棄しました。この時の苦境から沖繩を救ったのは、沖繩の人々でした。欧米諸国の本心を見抜いていた沖繩の人々は、彼らにつけ入れられるスキを与えませんでした。ペリーは、戦闘に備えると共に挑発にもなる測量を実施しましたが、戦闘にまでことを進められないままに沖繩を去りました。

明治政府になっても沖繩差別は繰り返されました。一八七一年（明治四年）廃藩置県が実施されましたが、その翌年に沖繩は琉球藩とされたのです。沖繩を日本の領土として明確にする意味で、沖繩県としたのは一八七九年のことでした。

しかし県民に対しては、他府県の人々と同等の資格や権利は与えられませんでし

た。例えば、一八九〇年(明治三三年)衆議院議員選挙法が実施されましたが、沖縄で実施されたのは一九二二年のことでした。ただ、納税や兵役の義務だけは早くから実施されていたのです。このような差別の中でも最もひどいものは、一九〇三年(明治三六年)に大阪で開催された勸業博覧会で「人類館事件」というのが起こりました。それは、茅葺小屋の前に二人の沖縄の女性が立たされ、説明者が「此奴は、此奴は」とムチで指しながら動物の見世物さながらに沖縄の生活様式を説明したのです。これを見た一人の沖縄県人の新聞への投書により、この見世物は中止となりました。また、就職や、結婚での差別もひどく、「但し、朝鮮人、台湾人、沖縄人はお断わり」との張紙も張られたほどでした。

このような差別の中で沖縄の人々が生きて行くには、「同化」しかありませんでした。

教育勅語は、この「同化」に一役も二役も貢献しました。教育勅語は、一八九〇年(明治三三年)に、忠君愛国の思想を子供達に植え付ける、皇民化教育を目的とするように定められました。沖縄では、本土以上の努力がはらわれました。それは、自分たちも日本人として認めてもらいたいという思いからでした。ですから、天皇の忠良なる臣民として皇国のために尽くす義務を果たすことによつて、始めて一人前の日本国民と見なされるための努力がはらわれたのです。このような教育状況を背景として、ひめゆり部隊や鉄血勤皇隊の悲劇は不可避なことだったのです。

このような沖縄差別の中で、日本軍は沖縄と沖縄の人々を守るという意識ではなく、あくまでも本土決戦を引伸すために、時間稼ぎとして抵抗したのです。沖縄の人々を巻き込んで。

第三軍の新設により、続々と沖縄に

移動してくる部隊によつて沖縄は混乱状態に陥りました。兵舎の準備がないため、学校、公民館、公共施設、が接收され、それでも足りず民家に分宿までしなければなりません。また、普段でも豊かではない食糧事情は一層悪化してしまいました。でも、沖縄の人々は、「無敵皇軍が自分たちの島を守ってくれる」という期待をもつて軍を見ていましたので、出来ることを精一杯したのです。

三 沖縄戦の始まり

一九四四年(昭和一九年)半ばごろから沖縄周辺の海域では、アメリカ軍の潜水艦の活動が活発化し、日本軍の船舶の被害が急増し、兵員や物資の輸送が困難になってきました。しかし日本政府は、沖縄の子供達やお年寄りを九州や台湾に疎開させる閣議決定を行ないました。

沖繩の人々は、海を越えて幼い子供たちを危険な船旅に出すことに不安を感じていましたが仕方ありません。その不安は、八月二日に現実のものとなりました。八月二日に那覇港を出港した対馬丸他二隻の疎開船は、二隻の駆逐艦に護衛されながら鹿児島へと向かいました。

二二日深夜、悪石あくせき島沖にさしかかった時、適潜水艦の攻撃を受け、対馬丸に三発の魚雷が命中し、子供だけでも七五八人、全部で一四八四人が亡くなりました。対馬丸の沈没は、極秘にされましたが、どこからともなく情報は流れ疎開する人の数は極端に少なくなりました。

一〇月一〇日の早朝からアメリカ軍は、延べ一四〇〇機の爆撃機を五回に分けて沖繩本島上空に飛来させ、九時間にわたる攻撃によって、本島は大打撃を受け、特に、那覇市の九〇パーセントが焼

失し、船や倉庫の被害も大きく、食料の被害も深刻となりました。この時点で、沖繩を防衛する海軍力も航空兵力も消失し、沖繩は完全にアメリカ軍の手中に落ちてしまいました。

四 アメリカ軍の上陸

アメリカ軍の具体的な沖繩本島上陸作戦は、一九四五年三月三日の艦載機による低空攻撃によって始められました。それまでは、B 24爆撃機の空襲だけだったのですが、艦載機による攻撃は、アメリカ軍の機動部隊が沖繩近海に接近している証拠でした。二四日には、本島南部の沖合に大艦隊がおしよせ、艦砲射撃が始まったのです。この艦砲射撃は三ヶ月余りにわたって昼夜を分かたず続けられることになるのです。

三月二六日になるとアメリカ軍は、慶

良間諸島への上陸を開始しました。それは本島への上陸に先立ち、安全な港を求めてのことでした。この日から沖繩の人々にとって最も辛い日々が始まるのでした。

慶良間諸島に配備されていた日本軍は、海上特攻隊の三個戦隊だけで、その特攻艇も三日間の砲爆撃でほとんど破壊されてしまいました。部隊はなすすべもなく山中に退避するほかありませんでした。アメリカ軍の上陸部隊は、ほとんど無傷で諸島の平地部を占領し、巨大な補給基地を建設したのです。

住民はアメリカ軍を恐れ、パニック状態におちいり、援護を求めて日本軍陣地に殺到しました。しかし、作戦のじやまになると追い返されました。座間味島では、部隊長の名で、住民は男女を問わず軍の戦闘に協力し、老人子供は忠魂碑前に集合、全員自決せよとの通達が出され、自決用の手榴弾が配られました。ほ

かの島も同様でした。逃げ場を失った人々は、山中で、あるいは家庭壕で、家族、親族ぐるみで自決を決行したのです。また日本兵によって多数の住民が殺害されました。

慶良間諸島で集団自決した人の数は、五五三名にのぼるといわれています。この慶良間諸島での集団自決や日本兵による住民殺害は、アメリカ軍上陸第一日目に、沖縄戦の縮図が出現したことになります。集団自決はこの後、伊江島、中部、南部の各戦線で、日本兵による住民殺害も各地で多発することになります。今や、沖縄本島は、空母四〇隻、戦艦二〇隻を中心とする一五〇〇隻に及ぶ艦隊に包囲され、猛烈な艦砲射撃と、一六〇〇機に及ぶ空母塔載機による銃撃、爆撃にさらされたのです。

アメリカ軍の本島への上陸は、四月一日午前八時三〇分に、中部西海岸から開

始されました。上陸に先だって、海岸には約一〇万発の砲弾、ロケット弾が撃ち込まれました。これは上陸が激戦になるとの考えからでしたが、上陸に際して日本軍の反撃はほとんどなくその日の午後四時までに六万人のアメリカ兵が上陸を完了したのです。

五 長くて激しい国内唯一の地上戦

沖縄戦は、三月二三日から始まり、日本軍の組織的抵抗の終了（六月九日）、軍司令官牛島満中将の自決（六月二三日）を経て、アメリカ軍の沖縄作戦終了宣言が発表された七月二日をもって一応の集結となりますが、公式に降伏調印式が行なわれたのは九月七日のことでした。

沖縄戦の終戦の日をいつにするかは

諸説がありますが、いずれにしましても、南北約二三〇キロメートルの細長い沖縄本島を主戦場にして戦われた戦闘としては異常な長期戦です。アメリカ軍の掃討作戦が終了した六月末日と考えても、一〇〇日間に及びますし、公式の降伏日までを数えますと半年近くになります。問題は、なぜこのような長期戦になったのかということです。

第一の原因は、沖縄守備軍の作戦方針が「戦略持久戦」に置かれたことです。それは、本土決戦を有利に導くための時間稼ぎの捨て石作戦だったからです。その結果、「鉄の暴風」と形容されるほどの激しい砲爆撃が三か月以上続くことになったのです。

第二の原因は、アメリカ軍にとって沖縄はこのうえない地理的条件を備えていたため、Keystoneofpacific（太平洋の要石）として、沖縄を奪取し基地として長期的に確保したかったのです。

このような中で戦闘を続ける日本軍にとって、現地自給の総動員作戦は不可欠なものになって行きました。

一九四五年六月二二日に公布された「国民義勇兵役法」は、本土決戦に備え、「一億玉碎」の合言葉の下に、全国の戦闘参加能力のある男女を軍の指揮下に置くものでありましたが、この国民の根こそぎ動員は既に沖縄で実験済のものだったのです。防衛隊、義勇隊学徒隊などの名目で根こそぎ動員された沖縄県民の「軍民一体の戦闘協力」が、国民義勇兵役法のモデルになったのです。その意味でも、沖縄戦は、本土決戦の実験版だったのです。

沖縄戦と聞くとすぐに「ひめゆり」と連想される程に、ひめゆり学徒隊は有名です。沖縄本島の南部、米須こめすの、ひめゆりの塔が建っているそばの壕は、陸軍病院の第三外科が最後にあつた壕

で、沖縄戦が終ろうとしていた六月一日にアメリカ軍の攻撃を受け、ひめゆり隊の女生徒三五名と教師五名、ほかに看護婦など合わせて約一〇〇名が最期を遂げたところです。この壕にいた女生徒で生き残ったのは僅かに五名でした。

ひめゆり隊はその前日に解散命令を受けて壕から脱出しようとしていたのですが、脱出する前に攻撃を受けたのです。

別の壕の女生徒たちの大部分は脱出出来たものの、逃げ場もなく砲火にさらされたり、集団自決をして多くの犠牲を出しました。女生徒を使うだけでなく、最後には彼女たちを戦場に放り出し、アメリカ軍に保護されることも許さなかった軍の勝手さ、降伏を認めず、死を強要する皇民化教育がこの悲劇を生んだのです。

ひめゆり隊とは、沖縄師範学校女子部と県立第一女学校の生徒の隊の名前で、戦後このように呼ばれるようになったのですが、女子学徒隊はこの他にも、五つ

の高等女学校から動員され、五七%にあたる三三四名もの女生徒が犠牲になったのです。

また、男子生徒の下級生は、通信隊員として、上級生は戦闘要員として、鉄血勳皇隊」の名で動員されました。通信隊は、砲火の中を伝令として壕から壕へと飛び回り七〇%にあたる二四七名が戦死するという大きな犠牲を出しました。学徒隊の全犠牲者は、半数以上に及ぶ一二四名と言われていますが、青年学校の男女生徒の数はいまだに不明で、全体では二千名を越える犠牲者になるといわれています。学徒隊への参加は、法的な根拠がないため、生徒の志願というかたちが取られ、保護者の承認が必要でしたが、学校が勝手に印鑑をつくり書類作成をしたこともあり、事実上、強制参加と同じだったのです。また、生徒たちは、天皇と祖国のために命を捧げることが当然と思うように日頃から徹底して教

育されており、学徒隊への参加に疑問をもつこともなかったのです。

先に国内唯一の地上戦と記しましたが、正確には硫黄島でも行なわれていません。しかし決定的に異なることは、硫黄島の場合は住民全てが島外に疎開したのに対して、沖縄戦では、住民を巻き込んだ戦いだったことです。また、一般邦人を巻き込んだ戦いは、サイパン、フィリピン、満蒙でも見られますが、これらは引き上げの機を逸した結果のことでしたが、老幼婦女子までも戦力化して敵前に送り込んだのは、沖縄を置いて他にはないのです。

戦場における住民は、軍から見れば危険な二面性を持っているのです。それは、戦闘協力者として利用出来る面と、反面、作戦の足手まといになる邪魔物としての存在です。この二つの面が、戦局の状況によって陰陽様々に織りなされた

のが、沖縄戦の悲劇の源泉でした。

沖縄では鍾乳洞のことを「ガマ」と呼びます。時には、壕とも呼ばれますが、

ガマは南部一帯に特に多く、規模も大きい。そのため、住民だけでなく軍にとっても格好の避難場所でした。戦線が南部に移ると、軍による壕追い出しが頻発します。軍民が雑居した壕では、食料強奪、幼児虐殺、スパイ容疑による住民虐殺などの惨劇が繰り返られるようになるのです。一方、アメリカ軍はガマの中の日本軍をせん滅するために、火焰放射器、爆雷、黄燐弾などを無差別に穴口から仕掛けたため、多数の住民も、ガマの中で死んで行ったのです。

沖縄戦での戦死者数は正確なところは不明ですが、沖縄県援護課がまとめた推定数だけでも、本土出身兵六万五九〇八名、沖縄出身軍人軍属二万八二二八名、戦闘参加者五万五二四六名、一般住民三

万八七五四名、アメリカ軍一万二五二〇名、合計二〇万六五六名となっています。

このうち戦闘参加者とは、援護法の適用を受けた一般住民のことですから、一般住民の犠牲者は九万四〇〇〇名になります。沖縄県出身軍人軍属の中には、学徒隊や防衛隊も含まれていますので、実質的には正規軍と区別しなければなりません。また、マラリア病死、餓死などを含めると、一般沖縄県民の犠牲者数は、一五万人前後になるだろうと推定されています。当時の県人口約六〇万人のうち実に四人に一人が戦没したことになります。

この一般住民の高い死亡率は何が原因なのでしょう。疎開の不徹底、激しい無差別砲撃、逃げ場のない孤島の地理的条件、食糧不足、医療品不足等々、多くの悪条件が重なったことであります。忘れてならないのは、日本軍の玉碎

精神、「生キテ捕囚ノ辱メヲ受ケズ」な
のです。

正規軍人を上回る住民犠牲は沖縄に
限ったことではありません。いつの場合
も、戦場で最大の犠牲を被るのは現地
住民なのです。先の大戦を考える時、中
国大陸で、東南アジアで、太平洋諸島で
最も多く亡くなったのは、現地の一般住
民だったのです。

六 アメリカ軍の沖縄占領の長

期化

三月二六日に慶良間諸島に上陸したア
メリカ軍は、同地域における日本政府の
行政権と司法権の停止を趣旨とする布告
を公布（米国海軍軍政府布告第一号）
し、沖縄での軍政が開始されました。ま
た、本島に上陸後五日目には、読谷村渡
具知軍政府を開設し、米国海軍軍政府布

告第一号（太平洋方面最高司令官ニミツ
ツ元帥の名を取ってニミッツ布告と呼ば
れる）によって琉球諸島の本土からの分
離を宣言しました。そして、一九四六年
一月二九日にはマッカーサーのGHQ覚
書によって北緯三〇度以南の南西諸島は
正式に日本の行政から分離されたので
す。それは、アメリカ軍の絶対的な軍事
支配が沖縄の人々に乗りかかることを意
味したのです。

それだけではなく、日本政府の、沖縄
切り捨て政策は、沖縄戦中の五月一一
日に開催された、最高戦争指導者会議で
の、米内外相の、国体護持のために沖
縄、小笠原、樺太、北千島を適の手に渡
してもよい、という意味の発言の中に
はっきりと表われていますし、ま
た、一九四七年九月二二日付けのいわゆ
る天皇メッセージ文書には、米国が沖縄
その他の琉球諸島の軍事占領を続けるよ
う日本の天皇が希望している」と明記さ

れ、このような日本政府の態度
が、一九五二年四月二八日に公布された
「日本国との平和条約」第三条による沖
縄分離まで一貫していたのです。

このような中でアメリカ軍は、大手を
振って沖縄の軍事基地化を進めて行くの
です。住民の生活を無視して。

第二次世界大戦は、世界に幾つかの分
裂国家を生み出しました。日本も、敗戦
直後、スターリンが要求したように北海
道の東半分をソ連が占領していたなら
ば、分裂国家になったかもしれませぬ。
分裂国家にならなかったのは日本にとっ
て幸運なことでした。日本国民の大多数
にとっては確かにそうでした。しかし、
沖縄県民にとって戦後二十七年間の歴史
は、分裂国家以上の苦しみだったので
す。それは沖縄には主権がなかったたので
す。主権は事実上施政権をもつアメリカ
の手にありました。沖縄人を主席とする

琉球政府は存在しましたが、その自治は限られていたのです。

そのような状態が、二六年前の一九七二年五月一五日まで二七年間も続いたのです。

復帰当時に歌われたフォークソングに、ドゥーチュイムニー（独りごと）という曲があります。二五番にも及ぶ膨大な歌詞で、沖縄の方言で歌われますが、その五番を標準語にしますと、唐の支配から大和の支配へ大和の支配からアメリカの支配へアメリカの支配から大和の支配へどうしてこんなに変わって行くのか俺の沖縄よとなります。この短い歌詞の中に、沖縄の苦しみと悲しみの歴史が歌われているのです。

沖縄県立平和祈念資料館の展示の結びの言葉を示してこの文を終了致します。

沖縄戦の実相にふれるたびに

戦争というものは

これほど残忍でこれほど汚辱にまみれたものはない

と思うのです

この なまなましい体験の前では
いかなる人でも

戦争を肯定し美化することはできないはず

戦争をおこすのは たしかに 人間です

しかしそれ以上に

戦争を許さない努力のできるのも

私たち 人間 ではないでしょうか

戦後このかた 私たちは

あらゆる戦争を憎み

平和な島を建設せねば と思いつ

づけてきました

これが

あまりにも大きすぎた代償を払って得た

得た

ゆずることのできない

私たちの信条なのです

横浜教区館山聖アンデレ教会

河崎望

Tel 〇四七〇-二三一-二三五七

Fax 〇四七〇-二三一-一六七八

e-mail kawanon@awa.or.jp